

## 活動報告

### 門松製作体験

12月7・8日、立神峡公園において、門松製作体験を行いました。当初は7日のみの開催でしたが、8日にも行ってほしいというお声を頂き、連日開催となりました。

7日は3人が参加され、竹を切る事ものこぎりを使うことも、初めてということでした。なかなか思うように切れずに、苦勞されていました。時間を掛けてゆっくりと作業されていました。「静かで環境も良く、気持ちの良い中の体験で、充実した時間を過ごせました」という感想を頂きました。出来上がった門松を大事そうに抱えながら帰宅されました。

8日は5組13人の親子の参加がありました。のこぎりなどを使用した経験があっても、バランス良く切ることが非常に難しいようで、何度も切り直しをしているようでした。親子の息の合った作業で、竹を押さえる係、竹を切る係と時間を掛けながら、自分たちのオリジナルの門松を製作されていました。門松のミニ知識としての話なども、しっかりと聞いていただき、「へえ〜」「おお〜」というように、初めて聞く知識に感動されていた様子でした。

約3時間掛けて作った思い思いの門松は、世界に1つだけです。大事にしていだきたいと思えます。



▲親子で共同作業



▲完成!!

### 竹炭焼き教室

水俣市にある愛林館へ炭焼き教室の研修に参加してきました。炭焼きの技術を学ぶとともに、里山の風物詩として、立神峡の伝統にしていこうと思い参加しました。通常の炭焼きと簡易炭焼きの紹介もあり資材の購入をしました。

知識では理解していましたが、いざ実施となると火の加減や時間など、非常に難しいということを知りました。立神峡の炭焼き人として、これから精進していきたいと思います。

日帰りで竹炭を製作できますので、今後炭焼きイベントも開いていきます。ご期待ください。



▲炭焼き開始



▲出来上がり

## マイ『シイタケ』を作ろう!!

シイタケの駒打ち体験を行います。立神峡公園内の間伐したクヌギの木を使い、シイタケの原木となる、ほだ木を作ります。間伐材の2次利用法の一つとして、里山保全につながります。普段スーパーなどで購入しているシイタケを、自分で栽培してみませんか。

- ◆日 時：2月15日(土) 9時30分～12時 (9時00分～受付)
- ◆定 員：5組 (20人程度)
- ◆参加費：大人1人 750円 子ども1人 500円
- ◆準備物：長袖の服・長ズボン (汚れても良い服装)、軍手、帽子、飲み物など
- ☆参加者にはお土産として、シイタケ原木を差し上げます。(1グループにつき1本)



お問い合わせ・お申し込み先  
立神峡公園管理組合 ☎62-1543 tategamikyou@yahoo.co.jp (8:30~17:30 火曜定休日)

## 町民文芸

### 短歌

- 百舌鳥の声季節外れの如月に  
縄張りめぐりけたたましき声  
法道寺 本田 花風
- 白羽に嘴を差し入れ一脚に  
眠るも鷺の防御姿勢か  
北野津 宮本 末秋
- 持ち来られ友の金柑新品種  
細長くして風邪薬良  
高塚 桑原ゆき代
- 天つかぜ一つの声聞くやあちこちに  
手と手重なり欲声挙がる  
吉本 高橋 澄子
- 今宵まさ御立岬にかもめ飛ぶ  
殿島みどり船が行き交う  
新村南 濱田 照昭
- 我が家では冬の野菜を七種類  
入れて七草粥の臼とする  
西野津 古崎スエノ
- 天を突くどんどの炎弾け来る  
主の千支の神馬飛ぶ  
南鹿野 尾崎 京子
- 歳ごとに食細くなる是もまた  
寄る年波の為せる仕業か  
吉本 橋村 正之

### 俳句

- 正月の赤酒一ぱい意識して  
今年の平和願いつつ  
西野津 古崎 栄子
- 人生の喜び重ね年賀状  
感動に浸る箱根駅伝  
高塚 竹中 力
- 仏間より新年のお香かをり来て  
迷い少なに我が道を往く  
桜ヶ丘 宮崎敬四郎
- 門松の絶えて久し我が家かな  
北野津 宮本 末秋
- 水仙の庭にまつすぐ咲きにけり  
高塚 桑原ゆき代
- 木の葉陰照らす千両年新た  
吉本 高橋 澄子
- 大晦日紅白歌手大笑い  
新村南 濱田 照昭
- 七回忌夫の想い出冬紅葉  
西野津 古崎スエノ
- 床の梅春を吸い込み膨らみて  
南鹿野 尾崎 京子
- 冬枯れの枝に残るし柿一つ  
西野津 古崎 栄子
- 学童の団の来て寒参り  
町 香山菊童子
- 初釜の静寂にありて釜の音  
町 香山セツ子

### 替歌シリーズ 乱れ髪 美空ひばり

髪かみの乱れを気に掛けた  
若いあの頃なつかしや  
憎や恨めし此の毛の薄さ  
あれやこれやと試して見たが  
増えはせずして只減るばかり  
捨てた思いをまた戻し  
すがる男の夢哀れ  
憎や恨めし此の毛の数よ  
増えて呉れとは言はないけれど  
せめて抜けるは此処までにして  
春はなんとか分けた髪  
櫛くしを使えぬ秋悲し  
憎や恨めし此の毛の姿  
鏡かがみながめて溜息ばかり  
ついて見たとて戻りはしない

### 舞姫【前編】

舞姫と言っても祇園の舞子さんや古の白拍子のことではない。太田(森林太郎 鴨外)の軍医として若き日の国の威信を背負ってドイツ留学した折の悲恋の物語、いや本人にとつて真に悲恋だったのか、当時「舞姫」を読んで疑念はあった。森家を国家を優先した別離の判断が、立場を優先した結果に真意を図りかねたから。

四十五、六年も前の記憶を読み起こすため古びた文庫本の文語体に悪戦苦闘し拾い読みしつつ、国文学の鴨外論から「舞姫」をたどると新たな発見があった。

舞姫エリスIIエリーゼヴィーゲルトは(一六七)一八九三、八十六歳で没。鴨外は(一八四)一八八八年留学、帰国の際、友人相澤と議りて「エリスが母に微なる生計を営むに足るほどの資本を興へ、あはれる狂女の胎内に遺し、子の生れむをりの事をも頼みおきぬ。」終章の悲劇の一文である。

【次号、後編へ続く】

投稿いただきました作品は、短歌・俳句それぞれ一句とします。必要な場合は、ルビを付けてください。また、確認のためお電話することもありますので、連絡先の記入をお願いします。